

## 奈良地域関連資料画像 DB の現状と課題

### Development of the Image Database of Nara Regional Visual :

#### Current Status and Prospect

千本 英史

Hideshi Chimoto

奈良女子大学 文学部, 奈良市北魚屋西町

Nara Women's University, Kitauoya-nishi-machi, Nara City

**あらまし:**「奈良地域資料画像データベース」は、大学の学術情報センター（附属図書館）のホームページから公開しているもので、奈良という地域に密着した、社寺所蔵絵図・典籍等に特化した画像全文データベースである (<http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/>)。

2015 年度末現在で、計 25 社寺等の 150 点以上(国宝 1 点、重文 6 点を含む)の資料を公開している。

今回の発表では、このデータベースのこれまでの歩みを振り返りつつ、現時点での問題点、今後の課題について報告し、会場からの積極的な批判を仰ぎたい。

**Summary:** "Image Database of Nara Regional Resources" is currently being developed while already being accessible online at the website of the Academic Information Center (AIC) of Nara Women's University. (<http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/>)

This database aims to make manipulable more and more literary and visual documents housed in the religious sites within the area surrounding Nara. As of March 2015, more than 150 texts (including one national treasure and six important cultural properties) from 25 sites have been incorporated.

We would like to overlook the hitherto steps of the development, and to discuss the current problems and prospects of our database.

**キーワード:** 画像データベース, 奈良, 社寺, 地域貢献

**Keywords:** image database, Nara, shrines and temples, contribution to local community

#### 1. 地域と密着した、全体DB

公開作品は、

(1) 奈良にある社寺等の所有する絵図もしくは絵巻・典籍(仏像や法具など立体的なものは含めない)

(2) 奈良以外にある社寺の所有する奈良に関係の深い絵図もしくは絵巻・典籍)

のいずれかに該当する作品に限定している。

現在の所蔵者は、神社では春日大社、手向山八幡宮、大神神社、多武峯談山神社、高津柿本神社(島根)の 5 社と、寺院では興福寺、西大寺、元興寺、誕生寺、金峯山寺、海住山寺、大智寺、宝山寺、達磨寺、長岳寺、

宗祐寺、青蓮寺、成覚寺(仙台)、聖光寺(京都)、檀王法林寺(京都)、西寿寺(京都)、西福寺(京都)、川崎大師平間寺(神奈川)の 19 寺院、および奈良市の南市町自治会(奈良国立博物館寄託)となる。

寺院のうちの最北地は、仙台の成覚寺だが、その「青海曼荼羅」は、京都の聖光寺のそれとともに、南都浄土三曼荼羅のうちの一つで(他は「当麻曼荼羅」と「智光曼荼羅」)、現在確認される十点余りのうち、ただ二つ室町時代の作とされる優品である。川崎大師の「蟹満寺縁起絵巻」は『日本霊異記』などに説話の載る、行基僧正に関わる絵巻で他に例をみない作品、また島

根の高津柿本神社には万葉集を代表する柿本人麻呂関連の多数の絵像を公開させていただいている。

これらの画像はいずれも、他機関の Web などによく見られるような、小画像でのカタログ的な紹介や、作品の一部分だけの紹介ではなく、掛け幅ならその絵図を全体撮影することはもちろん、絵巻でも典籍でも、最初から最後まで作品全体を高精細画像で公開している。その際、大画面作品や絵巻作品についてはスクロール機能などでスムーズな閲覧を、また冊子資料についてはページめくり機能でストレスのない閲覧を提供している。

また拡大機能によって、絵図の細部確認や典籍の書き込み状況など、細かな検討ができるように配慮し、さらに褪色等によって判別しにくい作品については、近赤外線撮影の画像を同時公開して、描線などの確認ができるようにしている。そのため、鑑賞だけに止まらず研究上の利用にも有効な形になっている。

## 2. 出発からの経緯

奈良女子大学の当時の附属図書館でホームページが立ち上げられたのは 1994 年末であった。まだ Windows95 が発売されるまえだから、全国の大学のうちでも比較的進んだ取り組みだったとしてよいだろう。1996 年 2 月には、画像公開のテストケースとして吉井勇訳・竹久夢二絵の図書館蔵の『新訳絵入伊勢物語』をカラー全文公開した。著作権の問題がクリアで



【図1】 試行として公開した「新訳絵入伊勢物語」

きる題材であったこと。夢二の挿し絵が美しかったこと。題材が『伊勢物語』なので、高校の現場などからも「現代語訳」ということでアクセスが見込まれたこと、などが作品選定の理由だった。予想は幸い的に中し、学内外で興味を持つ人が多かった。同じ 1996 年、4 月の新年度を迎え、当時の文部省から「大学改革推

進等経費」の交付を受け、女子高等師範学校時代からの『伊勢物語』の注釈書の諸写本・諸版本をデジタル撮影し、そのネット公開を指向する（これは後にデジタルデータを CD-ROM 化し、写本については翻刻を施して、『奈良女子大学附属図書館蔵 伊勢物語関係写本 解題と翻刻』2000 年として公刊した）とともに、元興寺文化財研究所のご支援を得ながら『元興寺極楽坊縁起絵巻』のデータアップを準備し、翌 1997 年 2 月に「画像原文データベース」公開を実現した（「画像で綴る奈良女子大学の九十年」「奈良女子大学女性関連資料」など複数のプロジェクトが含まれていたうちの一部としての公開だった）。

その後、公開点数を増やすなど努力を重ねる中、2000 年 9 月、デジタルフロンティア京都実行委員会主催の、第 2 回デジタルアーカイブアワード受賞が決定した。「画像原文データベース」全体としての受賞であったが、授賞理由には、「『元興寺極楽坊縁起絵巻』は、高精細画像で公開されており、図書館がインターネット公開技術を活用すれば博物館機能を備えることの可能性を示している」とされ、地域関連資料公開が第一に評価されたことは明らかだった。



【図2】 極楽坊縁起絵巻の極彩色は好評だった

「容易に閲覧することができない資料の全容を高精細で提供していることは、専門の研究はもちろん、一般利用者にとってもミ大いに有益である」と高く評価された。同時受賞が、NHK アーカイブスやスタンフォード大学といった大手ばかりであったこともあって、プロジェクトにかかわる現場以上に、大学の上層部にとって、いい意味で大きな刺激となった。この受賞によって、地方の小さな大学でもその地域ときちんと連携していけば、「全国区」として評価されるという意識が定着した。

### 3. 諸機関との連携

2003年には、文部科学省から「地域貢献特別支援事業費」が配分され、このプロジェクトもそのうちの一つに認められた。

この時点で、より多くの社寺との連携をめざし、奈良県教育委員会文化財保護課との恒常的な連携が計られ、現在に至っている。

もともとこのデータベースは出発時から元興寺文化財研究所の強い支援を受けて運用されてきた。元興寺の研究所は、奈良の地において多数の社寺の文化財の修復にかかわっているだけでなく、母体の元興寺自体が社会活動まで含めて広範な活動を積極的に行っている。プロジェクトがその当初から、この元興寺文化財研究所、さらに辻本泰善元興寺御住職のご支援を得ていたことは、奈良地域の社寺のご協力を得るうえで大きな力となった（「元興寺さんが加わってはるのなら大丈夫」という反応）が、ここでさらに奈良県の公的機関の全面的な協力を得ることができたことは、大きなメリットとなった。

2008年には成果公開のための科学研究費補助金を獲得し、「南都社寺文化財映像化グループ」として公開点数を一挙に大幅に増やすことができた。当時は撮影自体にかかる経費以上に、データを接合するなどの「加工費用」が多くかかり、せつかく社寺に撮影を許され、画像データを集積しながら、なかなかそれをDBにアップすることができずにいた。

この成果公開科研によって、春日大社から撮影を許されていた古地図類を一挙に公開したほか、多武峯談山神社の『聖徳太子絵伝』に太子の年齢によるタグづけを施したり、またかなり多くの「解説」の英文併記を実現するなど、活用の面で大きな進展があった。多武峯談山神社資料については、関係資料をCD-ROMの形にまとめ、ネット環境がない場所（当時はまだインターネット環境が十分でなく、デジタル公開の実際を見てもらおうとしてもなかなか理解されにくかった）でも、デモンストレーションが可能となった。

### 4. 奈良国立博物館との連携

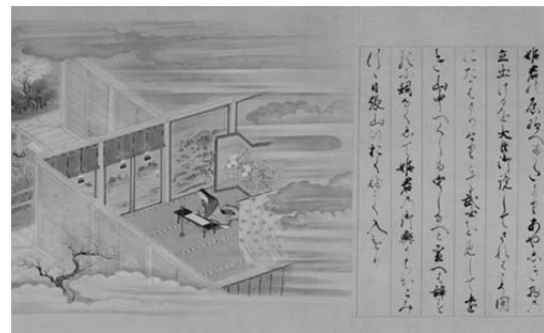
2013年度から、奈良国立博物館との間に「奈良地域関連資料画像データベースにおける奈良国立博物館と奈良女子大学附属図書館との相互協力に関する覚書」を締結し、博物館に寄託されている資料について、博物館側から画像データの提供を受けて、このDBで公開するという試みをスタートさせた。

現在DB公開している作品中、青蓮寺（宇陀）の『日

張山縁起絵巻』『当麻曼荼羅』、誕生寺（奈良町）の『当麻練供養図』、奈良市南市町自治会の『春日宮曼荼羅』など6作品はこの試みの成果である。

奈良の社寺が所蔵する絵画・典籍は、それぞれの神社・寺院にとって大切な社宝・寺宝であるが、火災・盗難など安全面などを考慮して、国公立などの博物館施設に寄託保管されているケースも少なくない。特に奈良国立博物館は仏教関連資料に特化した博物館として、「寄託」を積極的に進めてきた。

協定の締結以前にこのプロジェクトで調査・撮影させていただいたものの中にも、当時から奈良国立博物館に寄託されていた作品も複数あった。その場合には、以前には博物館の「写場」へ大学から依頼した専門の撮影スタッフ（業者）が出向き、教員が立ち会った上で、そこで撮影させていただくという形を取ってきた。しかしながら博物館の写場は本来、博物館の展覧会や調査研究目的の撮影のために使用するものであり、実際に展覧会開催に伴う図録製作のための撮影などとの日程調整なども困難なことが多く、また博物館にはもともと専門の撮影スタッフ・機材が揃っていることもあって、それを活用しないことは効率性を欠くということのはつねづね考えられてきた。そこで、大学と博物館のあいだで協定を結び、大学からの申請に基づき、所蔵者の許可を得た上で、博物館からデジタルデータの提供を受けることにしたのである。



【図3】協定による最初の作品 青蓮寺日張山縁起絵巻

この場合、撮影および現像などの一次的な処理は博物館側で行い、そのデータが無償で大学に提供される。ホームページ公開に伴う二次的処理（画像接合等）の費用については奈良女子大学側が負担する。データの著作権は博物館が保有するが、大学はネット公開だけでなく、複製画像を教育・研究目的で使用することを認められる。接合したデータは博物館側に提供され活用される、という内容になっている。

## 5. 地域貢献事業として

社寺所蔵作品については、作品についての解説だけでなく、その社寺自体の紹介文をも掲載することで、地域の文化財を社会、世界に向けて発信するという姿勢で取り組んでいる。また、その場合、美術資料などの実際に理解の深い、ネイティブの研究者による英文訳を付けて、外国からの閲覧にも対応できるように心がけている。

奈良地域の社寺は、比較的規模が小さいところが多く、優れた作品を所蔵しながらも、その作品をマスコミや書籍などで利用したいという申し込みを受けても、事務作業に手間取るケースが多い。ことに依頼が海外の機関からであれば、ことばの問題もあって、対応に苦慮するケースも出てくる。このDBでは学術情報センターの電子情報係がこうした海外機関との交渉を代行し、画像データの提供を実現している。海外のTVや大学など、多くの実績がある。



【図4】世阿弥自筆「江口」（宝山寺、生駒） 世阿弥の能は海外からの注目も多い

決裁月日	データベース	画像	申込者	使用目的
03月07日	長岳寺所蔵電子画像集	大地獄図	(株) 樫出版社	『地獄と極楽』
03月29日	談山神社所蔵電子画像集	聖徳太子絵伝 二幅	(株) 洋泉社	歴史REALブックス『歴代天皇125代』
05月27日	宝山寺所蔵電子画像集	柳生剣法許状	(株) 天夢人	『週刊ビジュアル江戸三百藩』第40号
06月20日	談山神社所蔵電子画像集	聖徳太子絵伝(物部合戦、崇峻天皇暗殺、推古天皇即位)、絹本多武峯縁起絵巻(甘檉の邸宅炎上)	(株) 洋泉社	歴史REAL『天皇と争乱の古代史』
07月04日	興福寺所蔵電子画像	日本霊異記 箱並びに巻姿	佐倉市	佐倉市広報番組 チャンネルさくら「特集 佐倉の怪談」
07月08日	談山神社所蔵電子画像集	聖徳太子絵伝(物部合戦、崇峻天皇暗殺、推古天皇即位、黒駒に乗り富士山に登る、太子、薨去、諸皇子、昇天) 絹本多武峯縁起絵巻(甘檉の邸宅炎上)	(株) 洋泉社	洋泉社MOOK『日本書紀 古代ヤマトを旅する』
07月11日	多武峯談山神社所蔵電子画像集	聖徳太子絵伝 一幅～四幅	(株) ネクス	BS-TBS「にっぽん! 歴史鑑定」(再放送)
09月12日	春日大社所蔵電子画像集	春日興福寺境内図	(株) ランズ	番組書籍『プラタモリ』第3巻 奈良
10月31日	宝山寺所蔵電子画像集	花鏡	江戸川区	えどがわ区民ニュース
11月15日	元興寺電子画像集	元興寺極楽坊縁起絵巻 上巻(部分)	奈良県立大学 ユーラシア研究センター	EURO-NARASIA Q
11月22日	興福寺所蔵電子画像	日本霊異記 箱並びに巻姿	(株) メルブラニング	ポブラディア+人物事典
12月19日	春日大社所蔵電子画像集	春日興福寺境内図	NHK	NHK総合プラタモリ「奈良」(再放送)

【表】2016.1～12 実績、今年は申し込みが比較的小数だが、書籍・雑誌・TVと多分野からの利用があった

国内外を通じて、例年20件～30件程度のデータ提供依頼があり、まずは所蔵する社寺の意向を確かめてもらい、OKであれば、センターに保存してあるデータから、先方が必要とする部分について提供を行う。この際、著作権が奈良国立博物館にある、協定による画像提供を受けた作品については、博物館規定に従っての処理となるが、それ以外の大多数の作品では、手続きも含めいっさい無料でのデータ提供を行っている。利用時は、所蔵社寺を明記することはもちろんだが、著作権所有者として大学名のクレジットも明示していただくようお願いしており、大学の社会貢献の姿勢もアピールさせていただくことにしている。

なかには、必ずしも作品を所蔵される社寺が、その

作品の持つ文化的な意味について、そのすべてを理解されているわけではない場合も出てくる。こうしたケースでは、大学という特性を活かして、こちら側の教員が直接出向き、その寺院なら寺院の檀家の方々の前で、「出張講義」をさせていただくなどのことも行ってきた。大学で行う公開講座などで、積極的に地域の文化財として紹介することは当然である。

## 6. 具体的撮影のさまざまな変化

スタートから二十年以上の年月を経て、さまざまに運用の実態も変化してきている。

まず撮影方法自体にもいくつかの変化があった。当初はデジタル撮影の扉度も高くなく、大型のアナログ

カメラ（4×5inch判など）で撮影した上で、データのデジタルへの変換を行っていた。だから初期に撮影した作品の場合、大学に残されているのは大型のリバーサルフィルムネガである。高精細デジタルカメラが普及すると、ノートパソコンと大容量ハードディスクを持ち込んでの撮影があたりまえとなった。その場で撮影画像が確認できるのはありがたい。

このDBでは近赤外線撮影を行う場合がしばしばあり、その場合は、後にパソコン画面上で、容易に特定部分だけを赤外線撮影画像に切り替える必要があるので、撮影時に通常撮影と赤外線撮影とでカメラの設置位置がずれることは避けねばならず、この点が結構やっかいである。撮影スタンドに通常撮影用と赤外線撮



【図5】金峯山寺「芳野曼荼羅図」の通常光撮影画像と近赤外線撮影画像

影用との二台のカメラをセットしておき、180°回転させて撮影するなどの対応が必要となる。

最近では大型資料の場合、仰角の問題を回避して平

面性を確実に保障するために、移動式のスキャナーでの撮影も試みている。

撮影データは原則としてTIFFデータでDVDに焼き付けて保存している。これとは別に画像を接合してパソコン上で閲覧できるように作成したコンテンツをCD-ROMの形にしても保存し、その双方を所蔵者の社寺にはお渡しするようにしている。社寺の方で独自にホームページなどで利用していただくためでもある。

最近では多くの社寺が、ホームページやブログを開発されている。その場合に、奈良女子大学のこのページへのリンクをしていただければ寺宝の紹介の上からも都合だと考え、お勧めしているが、実際にはほとんど実現していない。今後の課題である。

## 7. 運営経費の問題

現在の運営は、撮影経費を奈良女子大学地域貢献事業「古代奈良を中心とした歴史的文化遺産のデータ化」（万葉・古代文学等論文データベース化事業と合わせて今年度実績で年額13万円強）、奈良国立博物館から提供を受けた画像分も含んで、分割撮影した画像の接合処理、およびホームページへのアップ等経費を、学術情報センター電子情報係資料電子化経費のうち「寺社の保有文書等の撮影デジタル化」予算（年額約50万円程度）でまかなっている。合計して年額60万円強の予算がすべてである。

このDBプロジェクトがまがりなりにも二十余年にわたって継続してこられたのは、第一には奈良の諸社社のご厚意によることはいまでもない。それに加えて学術情報センター、社会連携センターなど事務方の熱意ある尽力が大きい。たとえ少額でも大学当局が、毎年、一年の欠落もなく運営費を交付しつづけてくれたことが継続要因の最大のものであった。

しかしながら、国立大学法人における運営費交付金の締め付けによるやむを得ない事態とはいえ、特に地域貢献事業経費は、わずか5年前には約90万円の配分実績があっただけに、いくら近年のデジタル撮影費用等が軽減傾向にあるとはいえ、この予算削減はプロジェクトの推進にとって危機的な事態となっている。実際には年間一、二点の新規撮影（しかも撮影機材搬入などを考えると、二点の場合は同一撮影箇所での撮影に限られる）がぎりぎりとなっており、地域との連携、テーマの選定において、著しく困難な状況に至っているとせねばならない。

外部予算の導入を考えるべき時期とかとも思うが、

特定の企業などとの連携が、寺社のご本意に背くことになる可能性もないとはいえず、地域貢献という大学本来のあり方ともかかわる問題であろう。

## 8. 当面する課題のいくつか

プロジェクト経費の払底が、現在の何より大きな問題であるが、そのほか焦眉の問題となっているものに以下のような事項がある。いずれもメンテナンス関連の費用がまかなえないという共通点を持っており、こうした継続的経費の支出と担当する人的な保証をどう確保するかが問われている。

まず、プロジェクトの創始以来、Adobe社のFlashを用いて画像公開をしてきたが、高等学校現場などでiPad等タブレットの活用が進み、画像の表示ができないケースが増え、途中からJPEG画像を併用している。しかしながらJPEG画像では、絵巻などの大きな画像の表示が難しく、拡大・縮小もスムーズにゆかないなど不都合が多かった。またFlash自体の将来性なども考慮にいと、これまでのコンテンツを順次HTML5とJavaScriptへと置き換えていく必要があり、今後三年間を使って順次置き換え作業を行う予定を立てている。もちろんそれに伴う費用の支出が必要となるわけで、頭の痛いところである。

絵巻物などについては、「詞書」部分の翻字、および全体の概要の説明などがあればいいだろうことは容易に想像できるが、実際に実現するとなるとハードルが高い。かつては、大学所蔵の近世の紀行文について、学生アルバイトを雇用して翻字を付して公開していた時期もあったが、翻字ミスが少なくなく、また教員がそれを一つ一つ検討することも時間的に実際的とはいえず、現在では翻字を外している。このことは、人文学初の大型プロジェクトとして鳴り物入りで推進が謳われた、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」でも、当初計画された翻字作業が実際には行われていないことから明らかのように、極めて困難な状況にあるといえる。国文学研究資料館が主導する同プロジェクトでは機械翻訳の可能性などが試行されているが、正直なところまだまだ実現段階にはほど遠いと考えられる。

インターネットの特性からいっても、せめて作品名と簡単な解説くらいは、英語訳を付したいのはやまやまであるが、最後に英訳を付したのは2008年の成果公開のための科学研究費補助金によるもので、近年公開の作品についてはまったく対応できていない。英訳と



【65】自治体所蔵の文化財についても積極的な公開を目指していきたい（奈良市南市町自治会蔵「春日宮曼荼羅」）

いっても、美術作品のそれについては、通例の翻訳作業とは質が違うので、ハードルは高い。また海外利用者の便宜、さらに日本の文化財の海外への公開の視点からは、中国語訳やハングル訳もぜひ実現したいところであるが、未整備に終わっている。

文化財の追加指定に対応できず、ネット上で「重要文化財」がそのように紹介できないというケースも実際に起きている。また、研究の進展に伴って解説は本来なら改定がなされねばならないが、現在の体制ではとても対応できそうもない。かといって、365日、24時間このDBだけを見続けているような部署が、現在の大学で求めえないことは、あまりに自明である。

いろいろ問題は山積だが、これまでの二十余年の経験を踏まえ、手段を尽くして、持続的な展開が可能となるよう、もう少し努力を重ねてみたいと考えている。